

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 172

北坂奥遺跡

一般農道整備事業(是里2期地区)に伴う発掘調査

2003

岡山県教育委員会

序

本書には、赤磐郡吉井町是里に所在する北坂奥遺跡の発掘調査成果を収載しました。

この調査は、一般農道整備事業（是里2期地区）に伴う発掘調査であります。

岡山県教育委員会では、この事業により破壊される周知の遺跡の取り扱いについて、関係部局と調整・協議を重ねてきました。その結果、現状での保存がきわめて困難であるとの結論に達し、やむなく記録保存のための発掘調査を実施することになりました。

調査の結果、標高250mの高所にあるにもかかわらず、弥生時代中期から後期の土器・石器を伴出する竪穴住居2軒と段状遺構15基、さらに舟形土壙が見つかりました。また、谷部の調査では中世の土器の存在も確認できました。

これらの成果を収めたこの報告書が、今後の研究、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史研究を深める資料として広く役立つよう期待しております。

発掘調査の実施および報告書の作成に際しましては、吉井町役場、吉井町教育委員会、岡山県東備地方振興局農林水産事業部、ならびに地元関係者各位から温かい御理解と御協力を賜りました。末筆ながら、記して厚くお礼申し上げます。

平成15年1月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

例 言

- 1 本書は、赤磐郡吉井町黒本における一般農道整備事業（是里2期地区）に伴い、岡山県教育委員会が岡山県東備地方振興局農林水産事業部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが平成11年度に確認調査、平成12年度に発掘調査を実施した北坂奥遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 北坂奥遺跡は、赤磐郡吉井町黒本字北坂奥1473-2他に所在する。
- 3 確認調査は、平成11年8月に岡山県古代吉備文化財センター職員金田善敬が、発掘調査は、平成12年4月から9月まで岡山県古代吉備文化財センター職員浅倉秀昭・杉山光紀・若林 学が実施した。調査面積は、確認調査が100m²、発掘調査は2,650m²である。
- 4 報告書整理は、平成13年8月1日～9月30日に岡山県古代吉備文化財センターで浅倉が行った。
- 5 本書の執筆・編集は浅倉が行い、また遺物写真の撮影については江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 6 本遺跡の出土遺物・図面・写真類は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本報告書に用いた高度値は海拔高であり、方位は真北である。
- 2 本報告書掲載の遺構および遺物実測図の縮尺はそれぞれ明記しているが、一部の例外を除き、次のように統一している。

遺構

竪穴住居・段状遺構・舟形土壇（1/60） 土壇（1/30）

遺物

土器（1/4） 石器（1/2・1/3） 古銭（1/2） 土製品・鉄器（1/3）

- 3 遺物番号については、土器は通し番号で、石器はS・土製品はC・金属にはMを数字の前に付した。
- 4 土器の実測図の中で中軸線左右に白抜きのあるものは、小片のため口径・底径の推定が困難なものである。
- 5 竪穴住居の床面が被熱した部分は、スクリーントーンで表現している。
- 6 時期区分は、一般的な政治史区分に準拠し、弥生時代は紀元前3世紀から紀元後3世紀、古墳時代は4世紀から7世紀、古代は8世紀から12世紀、中世は13世紀から16世紀までと捉えている。

目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と体制	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査・報告書作成の体制	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 発掘調査の概要	4
第1節 調査区の概要	4
第2節 調査の概要	8
1 弥生時代の遺構・遺物	8
2 中世の遺構・遺物	17
第4章 まとめ	22
報告書抄録	

図 目 次

第1図 是里周辺遺跡地区 (1/25,000)	第16図 段状遺構9 (1/60)
第2図 調査区全体図 (1/1,000)	第17図 段状遺構12 (1/60)
第3図 1区・2区遺構配置図 (1/400)	第18図 段状遺構13 (1/60)
第4図 3区遺構配置図 (1/400)	第19図 段状遺構14 (1/60)
第5図 4区遺構配置図 (1/400)	第20図 段状遺構15 (1/60)
第6図 竪穴住居1 (1/60)	第21図 舟形土壇 (1/60)
第7図 竪穴住居1出土遺物	第22図 土壇1 (1/30)
第8図 竪穴住居2 (1/60)	第23図 土壇2 (1/30)
第9図 竪穴住居2出土遺物	第24図 土壇4 (1/30)
第10図 段状遺構1 (1/60)・出土遺物	第25図 土壇5 (1/30)
第11図 段状遺構2 (1/60)・出土遺物	第26図 遺構に伴わない弥生時代遺物
第12図 段状遺構3 (1/60)	第27図 3区谷断面図 (1/80)
第13図 段状遺構5・7・8・10 (1/60)	第28図 3区谷出土中世遺物
第14図 段状遺構6 (1/60)	第29図 1・4区出土中世遺物
第15図 段状遺構4・5・7出土遺物	

図版目次

図版 1

- 1 調査区遠景（東上空から）
- 2 1区・2区全景（上が北）
- 3 3区全景（上が北西）
- 4 4区 a 全景（上が北東）

図版 2

- 1 竪穴住居 1（南東から）
- 2 竪穴住居 2 集石状況（北から）
- 3 竪穴住居 2 完掘状況（北から）

図版 3

- 1 段状遺構 1・2（南東から）
- 2 段状遺構 13（北東から）
- 3 舟形土壇 1（北東から）

図版 4

- 1 弥生土器
- 2 古代・中世土器
- 3 石器
- 4 その他出土遺物

表目次

第 1 表 石器観察表

第 2 表 土器観察表

第 3 表 遺構一覧表

第1章 調査に至る経緯と体制

第1節 調査に至る経緯

北坂奥遺跡は、かつて道路拡張工事時に弥生土器が出土したことから、昭和54年に岡山県教育委員会が発行した『岡山県遺跡地図（第6分冊）』（註1）で、「北谷上遺跡」として周知されていた。なお、平成3年に吉井町発行の『吉井町史』では、「北迫奥（北谷上）遺跡」（註2）として記載され、広く捉えれば同じ遺跡である。

さて、本遺跡は、昭和58年吉井町発注の老朽溜池改修「九門池」（吉井町草生地内）改修工事の際し、事業者による改修用鋼土採取で道路の一部が破壊されていた（註3）が、このたび、平成11年度になって県の一般農道整備事業（是里2期地区）に伴い、その道路予定地の一部に当遺跡が含まれることが判明した。岡山県教育委員会は関係部局と協議を重ね、最終的に、まず遺跡の範囲、規模等を確認するための調査を行い、その結果をもとにして、平成12年度に全面発掘することとなったものである。

なお、本報告書では、当遺跡（北谷上遺跡）を、「北坂奥遺跡」として扱ったが、これは平成11年8月に行った確認調査ののち、遺構検出地点の小字を参考にして、「北坂奥遺跡」と改名したものである。

第2節 調査・報告書作成の体制

本遺跡の調査は、岡山県教育委員会が岡山県東備地方振興局農林水産事業部から依頼されて岡山県古代吉備文化財センターが平成11年度に確認調査を、そして平成12年度に全面調査を実施した。

平成11年度 確認調査の体制

岡山県教育委員会	
教育長	黒瀬定生
岡山県教育庁	
教育次長	宮野正司
文化課	
課長	松井英治
課長代理	佐々部和生
参事	正岡睦夫
課長補佐（埋蔵文化財係長）	松本和男
文化財保護主任	大橋雅也
主任	奥山修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長	葛原克人
次長	大村俊臣
<総務課>	
課長	小倉昇
課長補佐（総務係長）	安西正則
主査	山本恭輔
<調査第一課>	
課長	高畑知功
課長補佐（第一係長）	中野雅美
文化財保護主事	金田善敬
	（調査担当）

平成12年度 全面調査の体制

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬定生

岡山県教育庁

教育次長 宮野正司

文化課

課長 松井英治

課長代理 佐々部和生

課長代理（埋蔵文化財係長） 松本和男

文化財保護主査 福本 明

主任 奥山修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡睦夫

次長 能登原巧

<総務課>

課長 小倉 昇

課長補佐（総務係長） 安西正則

主査 山本恭輔

<調査第三課>

課長 柳瀬昭彦

課長補佐（第一係長） 浅倉秀昭
(調査担当)

文化財保護主幹 杉山光紀
(調査担当)

主 事

若林 学
(調査担当)

平成13年度 報告書の体制

岡山県教育委員会

教育長 宮野正司

岡山県教育庁

教育次長 國貞忠克

文化課

課長 松井英治

課長代理（埋蔵文化財係長） 松本和男

課長代理 藤井守雄

主任 奥山修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡睦夫

次長 能登原巧

<総務課>

課長 安西正則

総務係長 田中秀樹

主任 小坂文男

<調査第三課>

課長 柳瀬昭彦

課長補佐（第二係長） 山磨康平

文化財保護主幹 浅倉秀昭
(報告書担当)

日誌抄

平成11年度 確認調査

8月 9日（月） 確認調査開始

8月12日（木） 確認調査終了

平成12年度 全面調査

4月 3日（月） 発掘準備

4月 5日（水） 1区表土掘削

4月10日（月） 資材搬入

4月28日（金） 1区調査終了

5月 1日（月） 2区調査開始

6月29日（木） 2区調査終了

7月 3日（月） 3区調査開始

7月28日（金） 3区調査終了

8月 1日（火） 4区調査開始

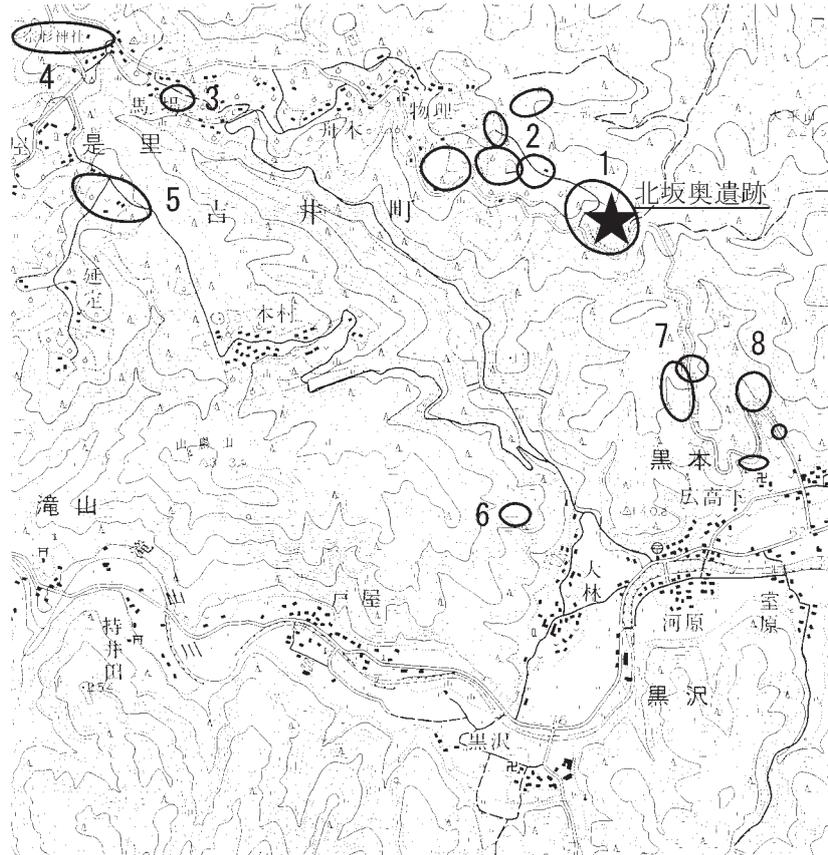
9月22日（金） 4区調査終了

9月29日（金） 事務所閉鎖

第2章 遺跡の位置と環境

北坂奥遺跡は、赤磐郡吉井町是里と黒本の境目に所在する。この付近は、吉井川の中流域に形成された吉備高原の東部に位置し、是里高原とも言われ、標高250m前後で吉井川周辺の平野からの比高は200mにも達している。遺跡地は高原とは言うものの起伏の激しい傾斜地でもある。現状では、わずかに存在する平坦地は水田に開発されている。遺跡地山となる地層は第三紀層の砂岩・泥岩および第四紀洪積層の山砂利層である。

本遺跡周辺で最も古い遺跡は8、西の谷遺跡で、滝山川から600m北に約30m登った谷間に縄文時代後期土器を出土している。現状ではまったく表採できない。2～7の遺跡はすべて是里高原上に所在する弥生時代に属する集落跡である。1、北坂奥遺跡は旧名を北谷上遺跡と言うが、吉井町教育委員会名の説明入り立て看板が現在も土取り場に立てられている。古墳時代の遺跡は付近にはないが、はるか1.5km東に柵原町飯岡の山並みが同じ高さで見晴らせるが、そこには著名な月の輪古墳がある。古代から中世の遺跡は古代の銅印を所蔵する宗形神社周辺に存在すると考えられる。



- | | | |
|----------|----------|----------|
| 1. 北坂奥遺跡 | 2. 桑間遺跡 | 3. 宗成遺跡 |
| 4. 稲坂遺跡 | 5. 梶屋遺跡 | 6. 愛宕山遺跡 |
| 7. 和田奥遺跡 | 8. 西の谷遺跡 | |

第1図 是里周辺遺跡地図 (1/25,000)

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区の概要

北坂奥遺跡の調査は、調査の順に1区～4区に区分けして実施した。調査範囲は、道路用地内に限り、東西に長く最大200m、南北に短く最大60mを測ることができる。そして、最終的に調査面積は、2,650m²に達した。

1区

1区は、平面形は台形を示し、面積は約800m²ある。西部は、比較的平坦であり、東方に緩やかに低く下がっていく傾斜地となっている。標高は、243～236mの範囲に入る。平坦部で検出できた遺構は、段状遺構3と土壙1・3および柱穴群である。緩斜面では段状遺構1・2が検出できた。遺構に伴わない遺物は、1区北西部と南部から主に採集できた。なお、1区の西部は土取り場で、10m近い断崖絶壁となっている。

2区

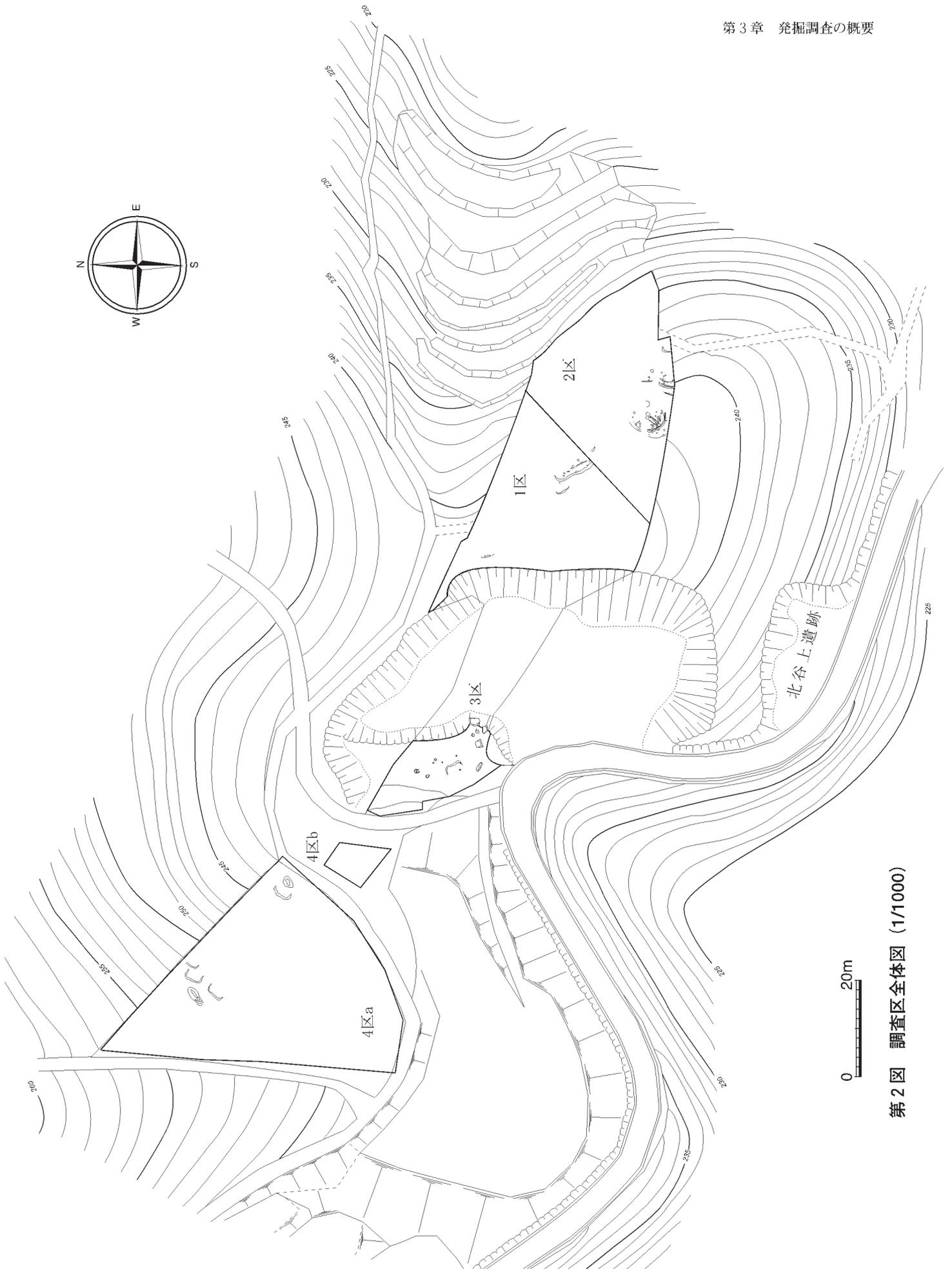
2区は、菱形に似た不定形な形状を示し、面積は約800m²ある。ここも西から東に向かって緩やかに降る緩斜面である。標高は、242～233mの範囲に入る。この区では南部の中腹から遺構が検出できた。竪穴住居1・段状遺構4～11・土壙2などである。段状遺構の一部は南の用地外に伸びていて調査は出来ていない。遺物はほとんど遺構の埋積土中から出土したものである。

3区

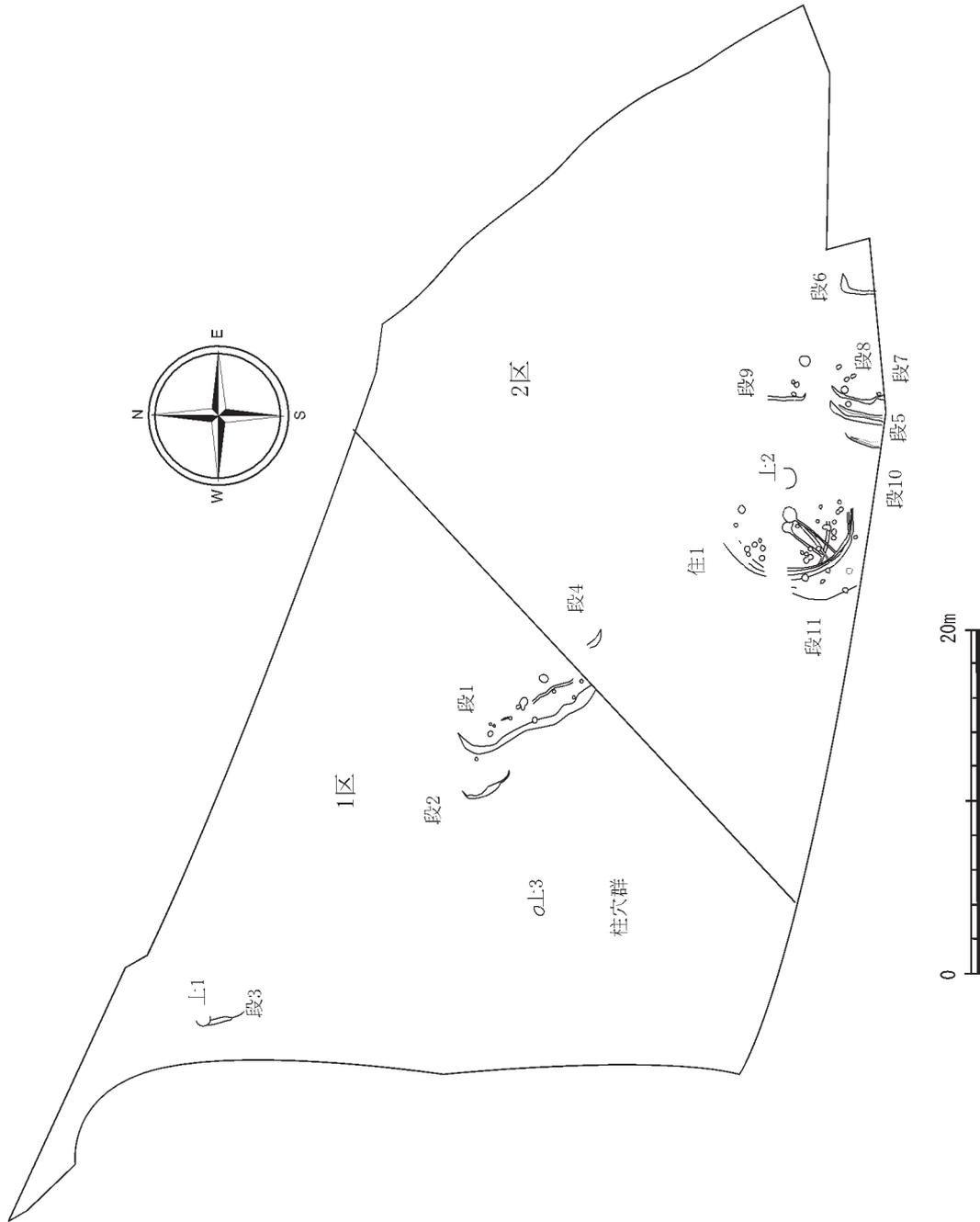
3区は、不定形な平面形を示し、面積は約150m²ある。ここは北から南に向かって緩やかに降る緩斜面であるが、東西の尾根にはさまれた谷底部分でもある。標高は、237～234mの範囲に入る。この区では西部で谷が検出できた。段状遺構12・土壙4は南部で、谷に向かう西向き斜面において検出できた。遺物はほとんど谷の埋積土中から出土したものである。なお、この区の東側は、土取り場で、1～2mの地下げが行われている。

4区

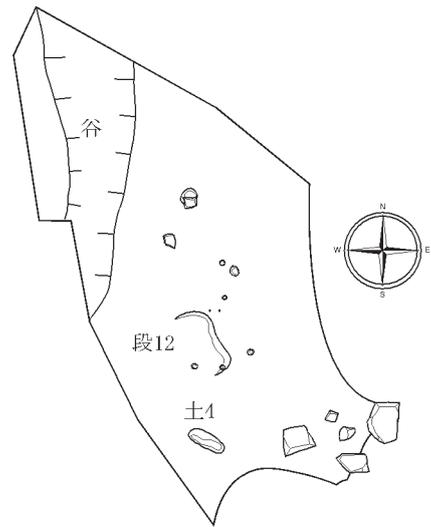
4区は、三角形の平面形を示し、面積は約1,000m²ある。ここは北西から南東に向かってかなり急激に降る斜面である。標高は、257～243mの範囲に入る。この区では北東部で遺構が検出できた。竪穴住居2・段状遺構13～15・舟形土壙・土壙5などを検出できた。遺物は遺構から出土したものと段状遺構14の南で土器だまりとして採集したものである。なお、この区の東側に中世遺物包含層が存在したため、4区bとして調査している。



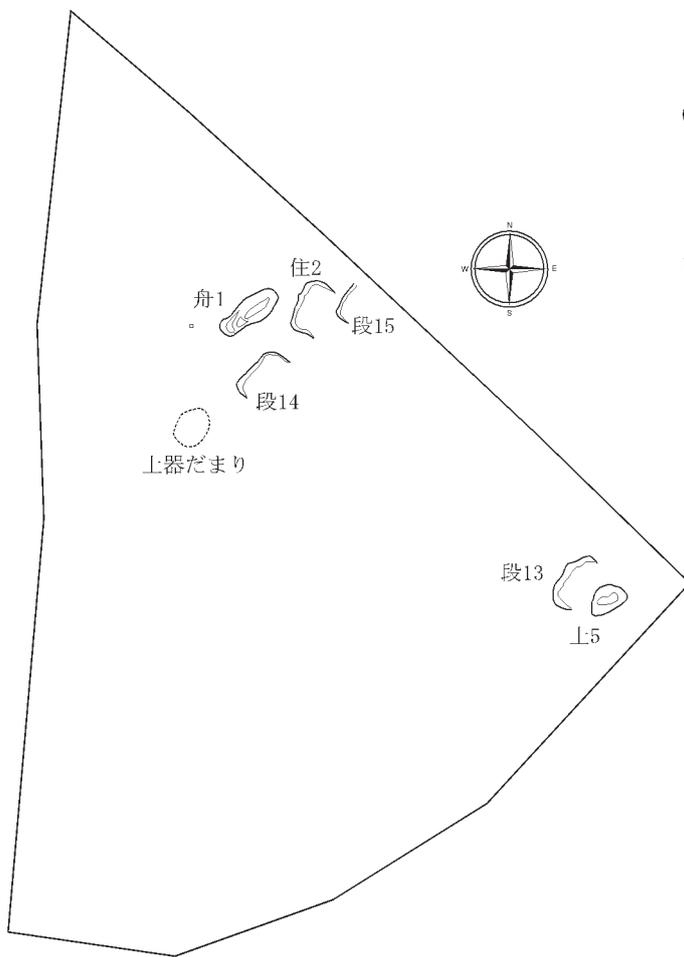
第2図 調査区全体図 (1/1000)



第3図 1区・2区遺構配置図 (1/400)



第4図 3区遺構配置図 (1/400)



第5図 4区遺構配置図 (1/400)

第2節 調査の概要

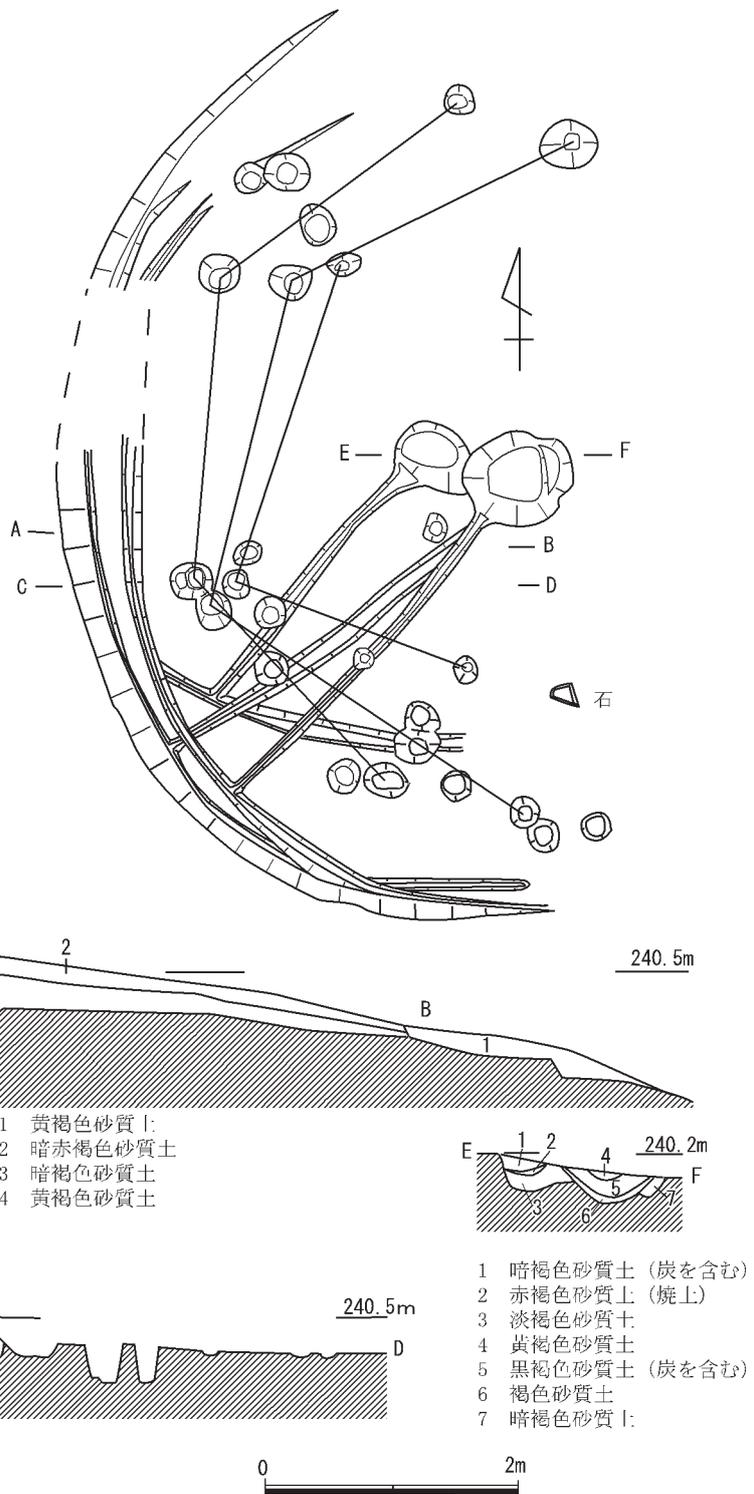
1 弥生時代の遺構・遺物

(1) 竪穴住居

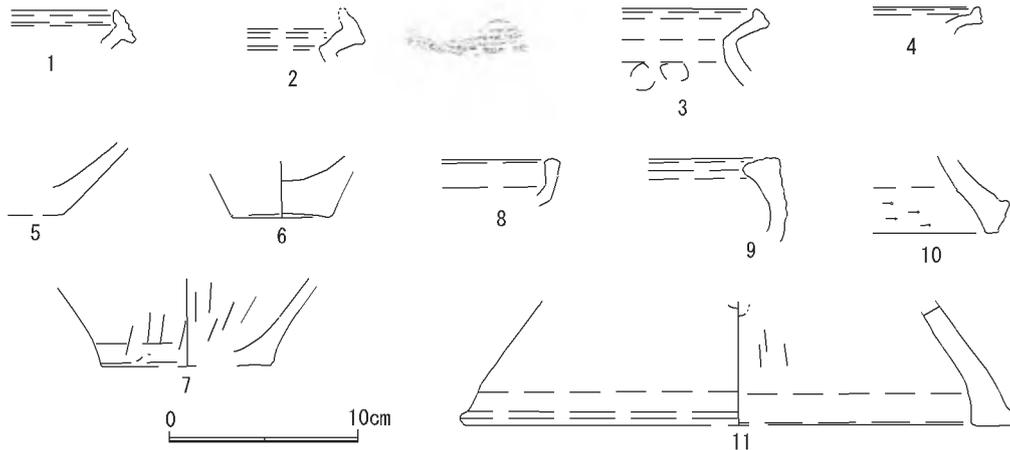
竪穴住居1 (第3図・第6図)

2区南部において検出した半円形の平面形を示す竪穴住居である。検出面は西が高く、東に低い。西の壁の高さは床面から25cmある。壁体溝は3本検出できた。中央穴は壁際から3m付近に3個切りあって存在した。また、間仕切り状の溝が3本壁体溝から中央穴につながっている。柱穴は6個が1塊となっており、他の塊との距離が約2.5m離れて検出できた。床面は中央穴付近まで平坦であるが、そこから東は削平されている。床面積は約38m²と推定できる。

以上のことからこの住居は壁体溝や中央穴および間仕切り溝まで掘りなおす大改修工事を2回行い、柱の埋めなおしを5回以上実施したことが判明した。



第6図 竪穴住居1 (1/60)



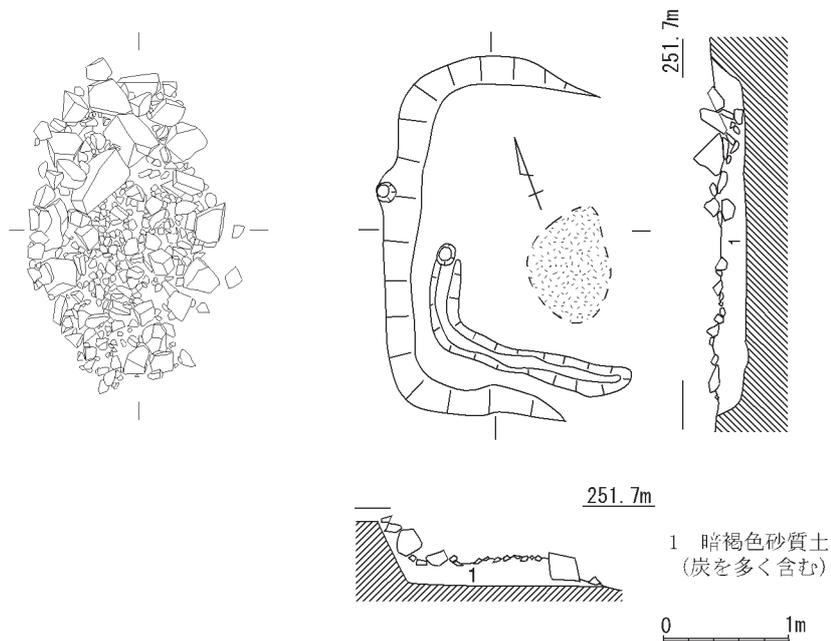
第7図 竪穴住居1 出土遺物

竪穴住居1では、少量の土器片が埋積土中から出土している。口縁部・底部の碎片を11点実測し、掲載している。1・2の甕は、口縁端部が上下に拡張し、端外面に凹線文を施す。3・4の甕は、口縁端部を上になお少し伸ばす。5・6・7は甕の底部である。8・9は高杯の口縁部、10・11は高杯の脚裾部である。

以上の遺物からこの住居の廃棄された時期は、弥生時代中期後葉と考えられる。

竪穴住居2 (第3図・第8図)

4区の北西部で検出できた平面形が長方形を示す竪穴住居である。検出当初は集石遺構として取り扱っていた。一辺50cmもある大きな角礫が楕円形に周囲を囲うように配石され、中央部はこぶし大以下の小角礫を散布した状態であった。石は敷いているようには見えず、重なりもほとんどない。

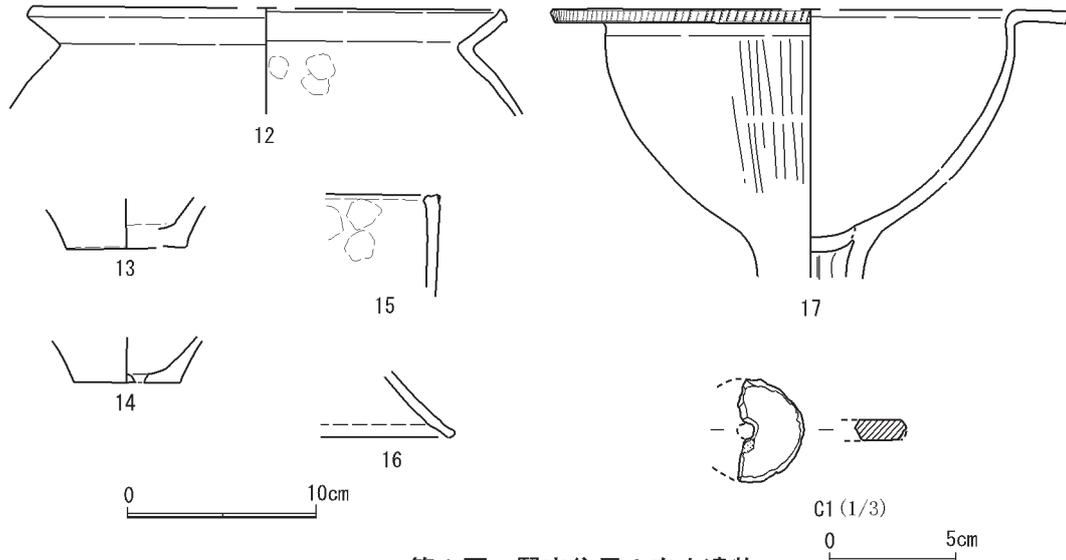


第8図 竪穴住居2 (1/60)

下層の住居は、段状遺構として調査を行った。しかし、壁体溝が壁からやや離れた位置にL字状に検出でき、また床面中央部分に火処が認められ、柱穴もあることなどから竪穴住居と考えた。

遺物は、石の間から出土したものがほとんどである。12・13は甕、14は甑、15は鉢、16・17は高杯、C1は紡錘車である。

土器から見て、この住居の廃絶されたのは、弥生時代中期後葉であろう。



第9図 竪穴住居2出土遺物

(2) 段状遺構

段状遺構1 (第3図・第10図)

1区の中央南端で検出した長大な段状遺構である。確認調査時に南端を削平されているので全長は不明であるが、現存長約8.2mを測る。床面から壁の最大の高さは、約60cmもある。壁体溝と考えられる幅の広い溝も検出できた。平坦な床の幅は、約2.0mあり、溝の幅はその半分を占める。柱穴は10本発見したが2列に並ぶように見える。その大きさ、深さはさまざまである。

遺物は埋積土中でも上層から出土しており、床面から出土したものはほとんどない。18の甕は、口縁端面に凹線文を施している。21の甕の内面は、首に近い位置までヘラケズリされている。22の高杯は、口縁端部が水平になり、その面に2条の凹線文を施す。S1の石材は泥質片岩で、穴のない石包丁の可能性が高い。

遺物から考えて、この遺構の廃絶時期は、弥生時代後期初頭と推定したい。

段状遺構2 (第3図・第11図)

段状遺構1の西北で検出した小型の段状遺構である。段の平坦面の大きさは、南北3.0m・東西1.0mを測ることができる。北端には、幅5cm・深さ2cmの壁体溝が鉤型に残存している。壁の高さは、最大35cmある。柱穴は、第11図には図示していないが、伴う可能性は高い。

遺物は、実測できる程度の大きさ・部位の土器が少量埋積土中と床面に付着した状態で出土している。25～27は、甕の口縁部と底部片である。甕の内面は、ヘラケズリされている。28～30は、高杯の口縁部ないし脚部で、口縁端部の形状が異なるものでもある。

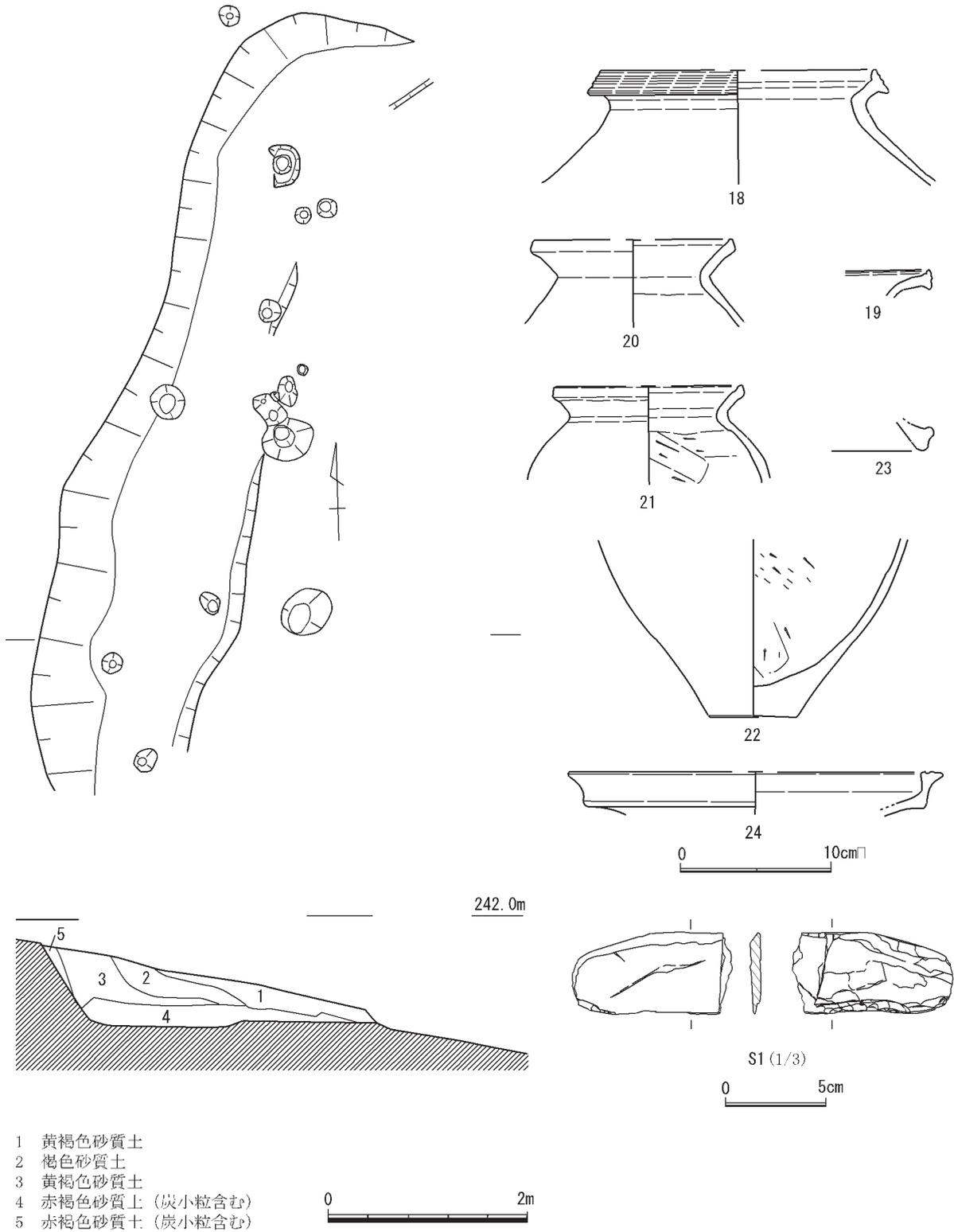
以上のことから、この遺構の廃棄された時期は、弥生時代後期初頭と考えたい。

段状遺構3 (第3図・第12図)

1区の西北平坦地で検出した小型の段状遺構である。壁体溝と考えられる溝がやや曲線的に2.2m残存している。柱穴がないため、残存状態の悪い段状遺構とした。

遺物は、土器片が少量とヒメモモの炭化した種子が溝内で出土している。

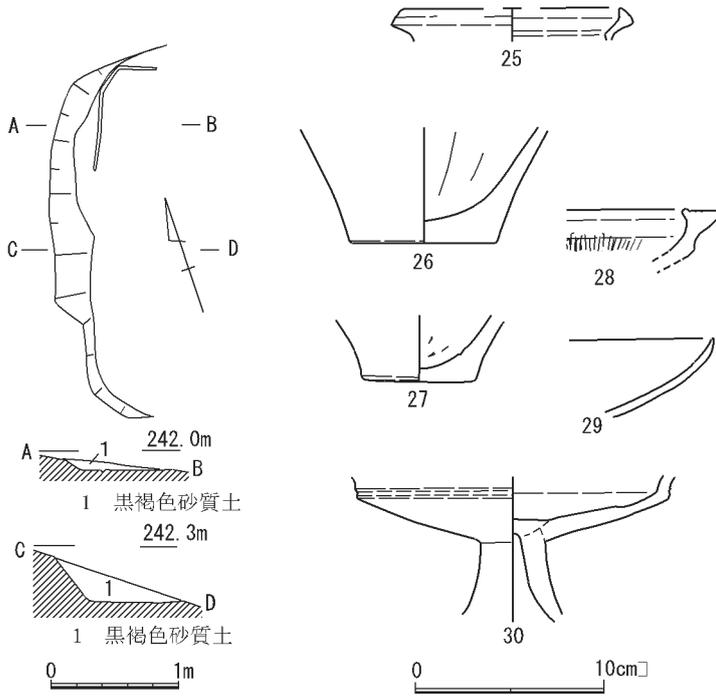
土器片から見て、この遺構の廃棄された時期は、弥生時代後期初頭と考えたい。



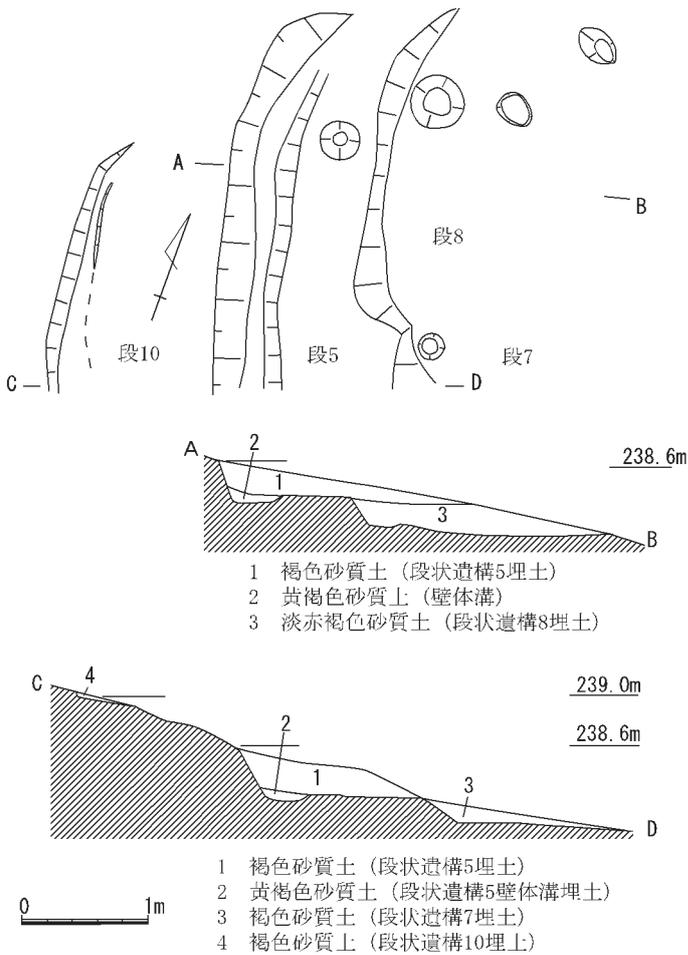
第10図 段状遺構1 (1/60)・出土遺物

段状遺構4 (第3図・第15図)

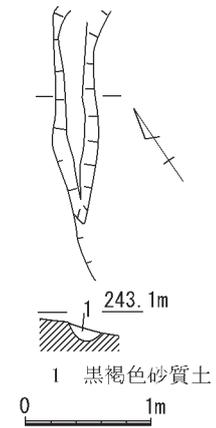
2区の西緩傾斜地で検出した小型の段状遺構である。段状遺構1の南東に位置する。長さ1.0m・高さ10cmの壁のみを検出できた。遺物は、31の甕底部が出土した。



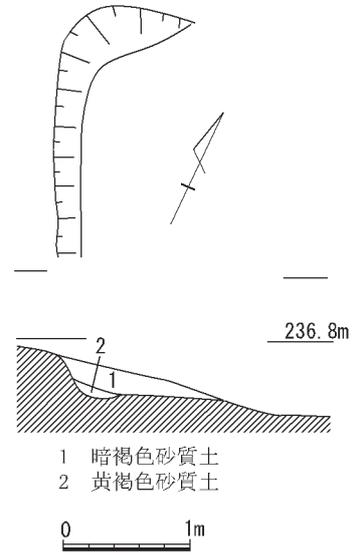
第11図 段状遺構 2 (1/60) ・出土遺物



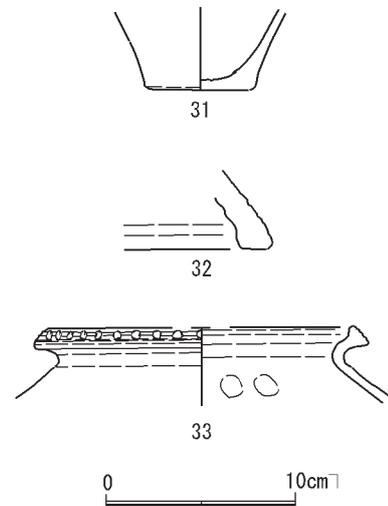
第13図 段状遺構 5・7・8・10 (1/60)



第12図 段状遺構 3 (1/60)



第14図 段状遺構 6 (1/60)



第15図 段状遺構 4・5・7 出土遺物

段状遺構 5 (第3図・第13図・第15図)

2区の南端で検出された段状遺構で、大きさは、長さ3.0m、壁の高さ35cm、平坦面の幅90cmを測ることができる。段の北方に1本検出した柱穴は、直径30cm・深さ20cmで、壁体溝は、35cmの幅で、深さは8cmである。

遺物は、32の器台脚片が出土している。

時期は、弥生時代中期後葉であろう。

段状遺構 6 (第3図・第13図)

2区の南東で検出された段状遺構で、大きさは、長さ2.0m、壁の高さ25cm、平坦面の幅1.0mを測ることができる。柱穴・遺物はない。壁体溝は、断面では確認できる。

時期は、弥生時代中期後葉以降であろう。

段状遺構 7 (第3図・第13図・第15図)

2区の南端で検出された段状遺構で、大半は用地外にあり、大きさは、長さ50cm、壁の高さ25cm、平坦面の幅1.0mを測ることができる。柱穴・壁体溝はない。

遺物は、33の甕が出土し、時期は、弥生時代中期後葉以降であろう。

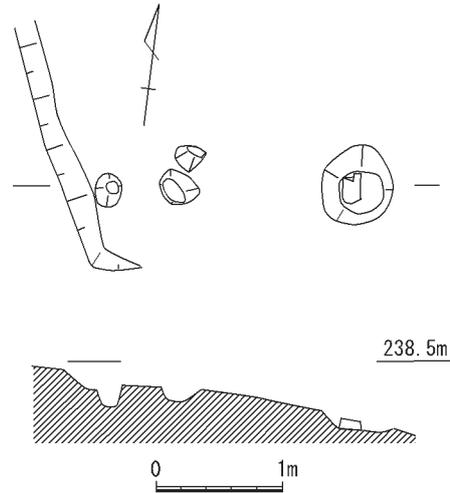
段状遺構 8 (第3図・第13図)

段状遺構7と同じレベルでその北側につくられたもので、大きさは、長さ3.7m、壁の高さ20cm、平坦面の幅1.8mを測ることができる。柱穴は2本検出した。壁体溝は断面では確認できた。

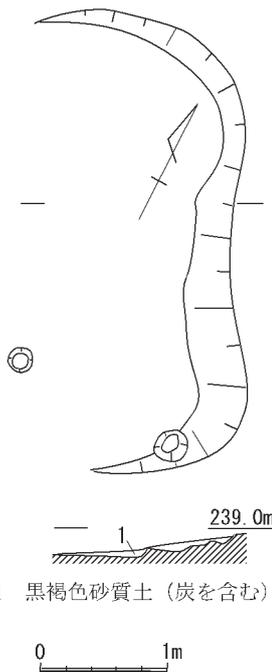
遺物は、出土していないが、遺構の時期は、弥生時代中期後葉以降であろう。

段状遺構 9 (第3図・第16図)

段状遺構8と同じレベルでその北側につくられたもので、大きさは、長さ2.4m以上、壁の高さ

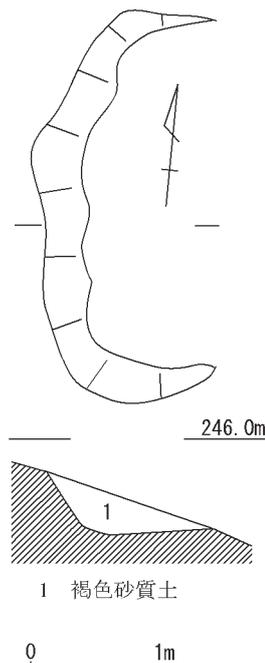


第16図 段状遺構 9 (1/60)



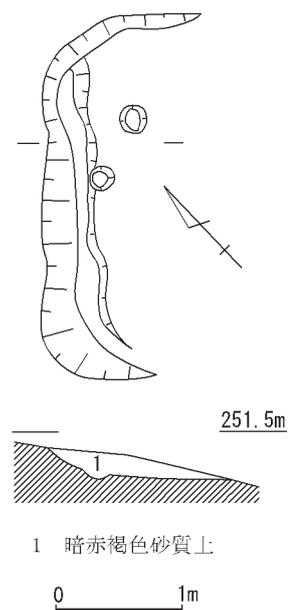
1 黒褐色砂質土 (炭を含む)

第17図 段状遺構12 (1/60)



1 褐色砂質土

第18図 段状遺構13 (1/60)



1 暗赤褐色砂質土

第19図 段状遺構14 (1/60)

30cm、平坦面の幅50cmを測ることができる。壁体溝は、長さ1.5m検出できた。

遺物は、出土していないが、遺構の時期は、弥生時代中期後葉以降であろう。

段状遺構10 (第3図・第13図)

段状遺構5の西斜面上方につくられたもので、大きさは、長さ2.2m以上、壁の高さ10cm、平坦面の幅20cmを測ることができる。壁体溝は、長さ90cmほど検出した。

遺物はないが、遺構の時期は、弥生時代中期後葉以降であろう。

段状遺構11 (第3図)

竪穴住居1の西斜面上方につくられたもので、大きさは、長さ4.0m以上、壁の高さ10cm、平坦面の幅20cmを測ることができる。壁体溝はない。柱穴は2本を伴う。

遺物はないが、遺構の時期は、弥生時代中期後葉以降であろう。

段状遺構12 (第4図・第17図)

3区の南部で検出した段状遺構で、大きさは、長さ3.6m、壁の高さ10cm、平坦面の幅1.0mを測ることができる。壁体溝はない。柱穴は2本確認している。

遺物はないが、遺構の時期は、弥生時代中期後葉以降であろう。

段状遺構13 (第5図・第18図)

4区の東端部で検出した段状遺構で、大きさは、長さ3.1m、壁の高さ50cm、平坦面の幅80cmを測ることができる。壁体溝・柱穴はない。

遺物はないが、遺構の時期は、弥生時代中期後葉以降であろう。

段状遺構14 (第5図・第19図)

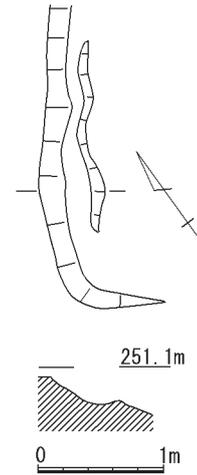
4区の北部竪穴住居2の南西で検出した段状遺構で、大きさは、長さ3.8m、壁の高さ20cm、平坦面の幅90cmを測ることができる。壁体溝・柱穴を確認している。竪穴住居2と比べて足りないのは床面に火処が見つからないことである。このことから住居にできなかった。

遺物はないが、遺構の時期は、弥生時代中期後葉以降であろう。

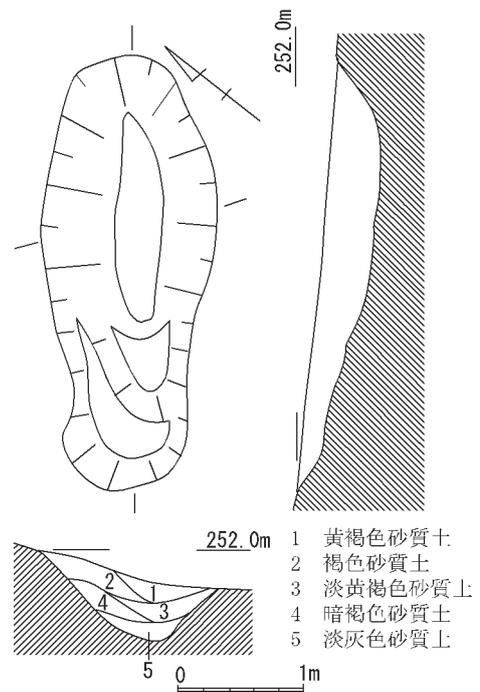
段状遺構15 (第5図・第20図)

4区の北部竪穴住居2の東で検出した段状遺構で、大きさは、長さ2.3m以上、壁の高さ25cm、床面の幅20cmを測ることができる。壁体溝を確認している。その大きさは、長さ1.5m・幅30cmを測ることができ、西の壁際にわずかに「S」字状に残存している。

遺物はないが、遺構の時期は、弥生時代中期後葉以降であろう。



第20図 段状遺構15 (1/60)

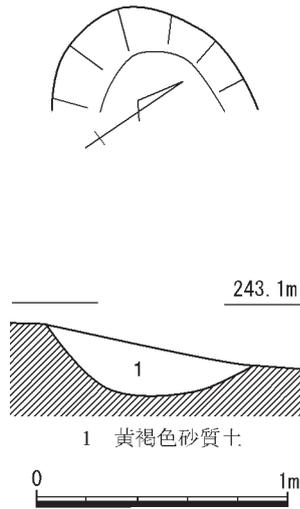


第21図 舟形土壌 (1/60)

(3) 土 壙

舟形土壙 (第5図・第21図)

4区竪穴住居2の西で検出した平面形・断面形あわせて舟形をした土壙である。大きさは、長さ3.5m、幅1.4m、深さ40cmを測ることができる。長軸は北東から南西に向き、床は3段となって深くなり、一番深いところは中央になく、北東部に位置する。



第22図 土壙1 (1/30)

土層は5層に分かれているが、いずれも遺物を含まない。

時期は弥生中期と考えたい。

土壙1 (第3図・第22図)

1区段状遺構3の北部にあって、その壁体溝を切っている土壙である。確認調査の際半分が削平されているが、円形を平面形とする。断面とあわせて見ると、碗形を呈する。大きさは、直径80cm、深さ30cmである。

遺物はまったく出土していない。切り合いからは、段状遺構3より新しいと言える。

土壙2 (第3図・第23図)

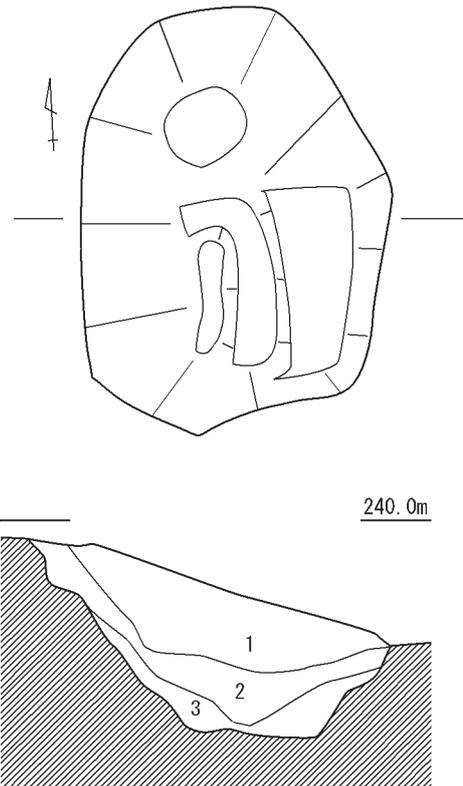
2区竪穴住居1の東部にあって、その床面より下層に位置する楕円形土壙である。断面を見ると、3段に段をつけて深くなっている。大きさは、長軸1.6m、短軸80cm、深さ80cmである。

遺物はまったく出土していないが、土層からは、竪穴住居1より古いと言える。

土壙3 (第3図)

1区平坦地の中央付近にある土壙である。楕円形を平面形とする。詳細な図面を載せていないが、大きさは、長軸80cm、短軸60cm、深さ20cmである。

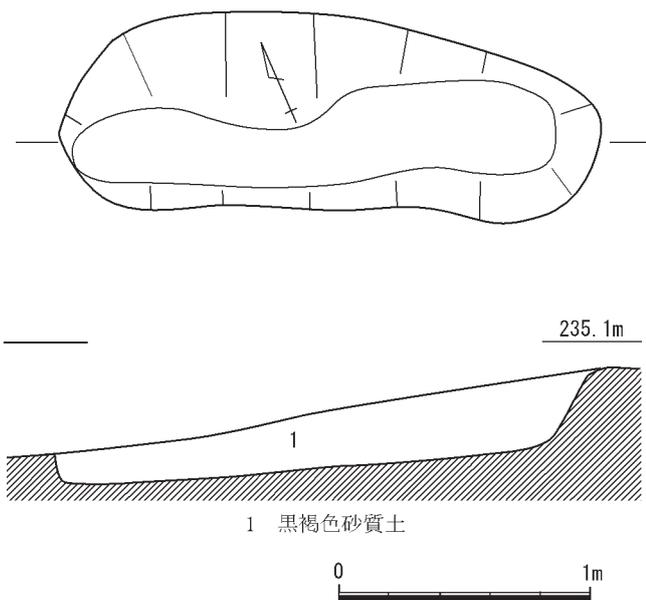
遺物はまったく出土していないが、時期は、弥生時代と考えたい。



- 1 明茶褐色砂質土
- 2 淡黄褐色砂礫
- 3 黄褐色砂礫



第23図 土壙2 (1/30)



- 1 黒褐色砂質土



第24図 土壙4 (1/30)

土壙 4 (第4図・第24図)

3区段状遺構12の南部に位置する土壙である。長楕円形を平面形とする。底面を見ると、ひょうたん形であり、平坦でもある。大きさは、長軸2.1m、短軸80cm、深さ35cmである。

遺物はまったく出土していない。

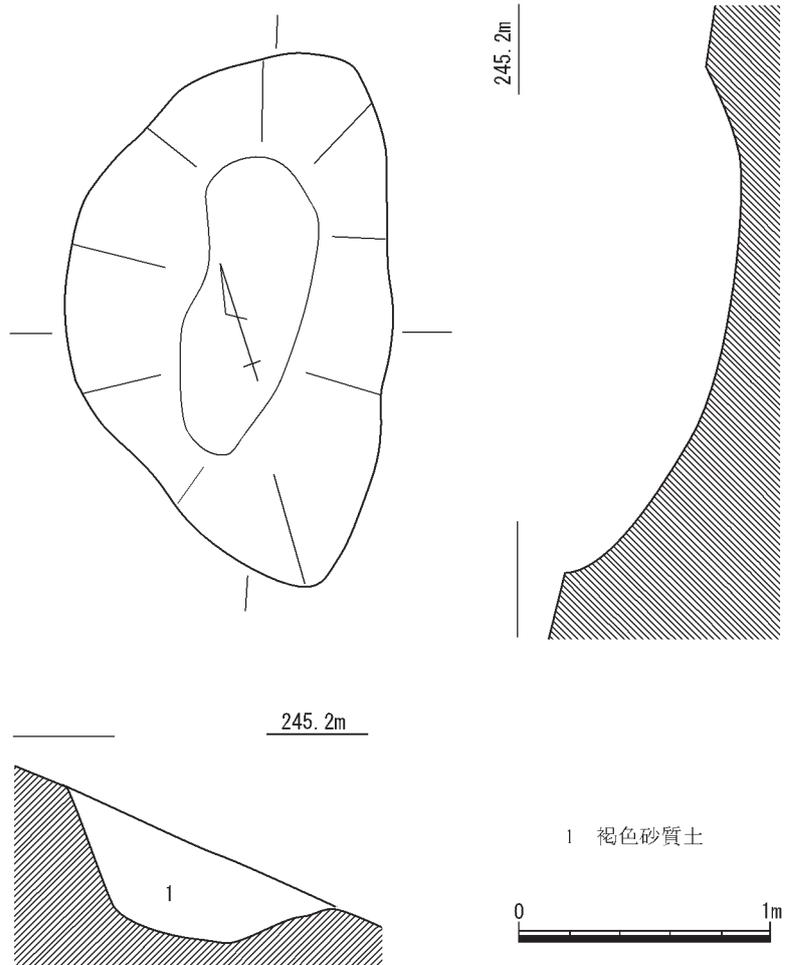
時期は、弥生時代と考えたい。

土壙 5 (第5図・第25図)

4区段状遺構13の東部に位置する土壙である。長楕円形を平面形とする。底面を見ると、ひょうたん形であり、楕形でもある。大きさは、長軸2.1m、短軸1.3m、深さ80cmである。

遺物はまったく出土していない。

時期は、4区段状遺構13よりも古いが、弥生時代と考えたい。



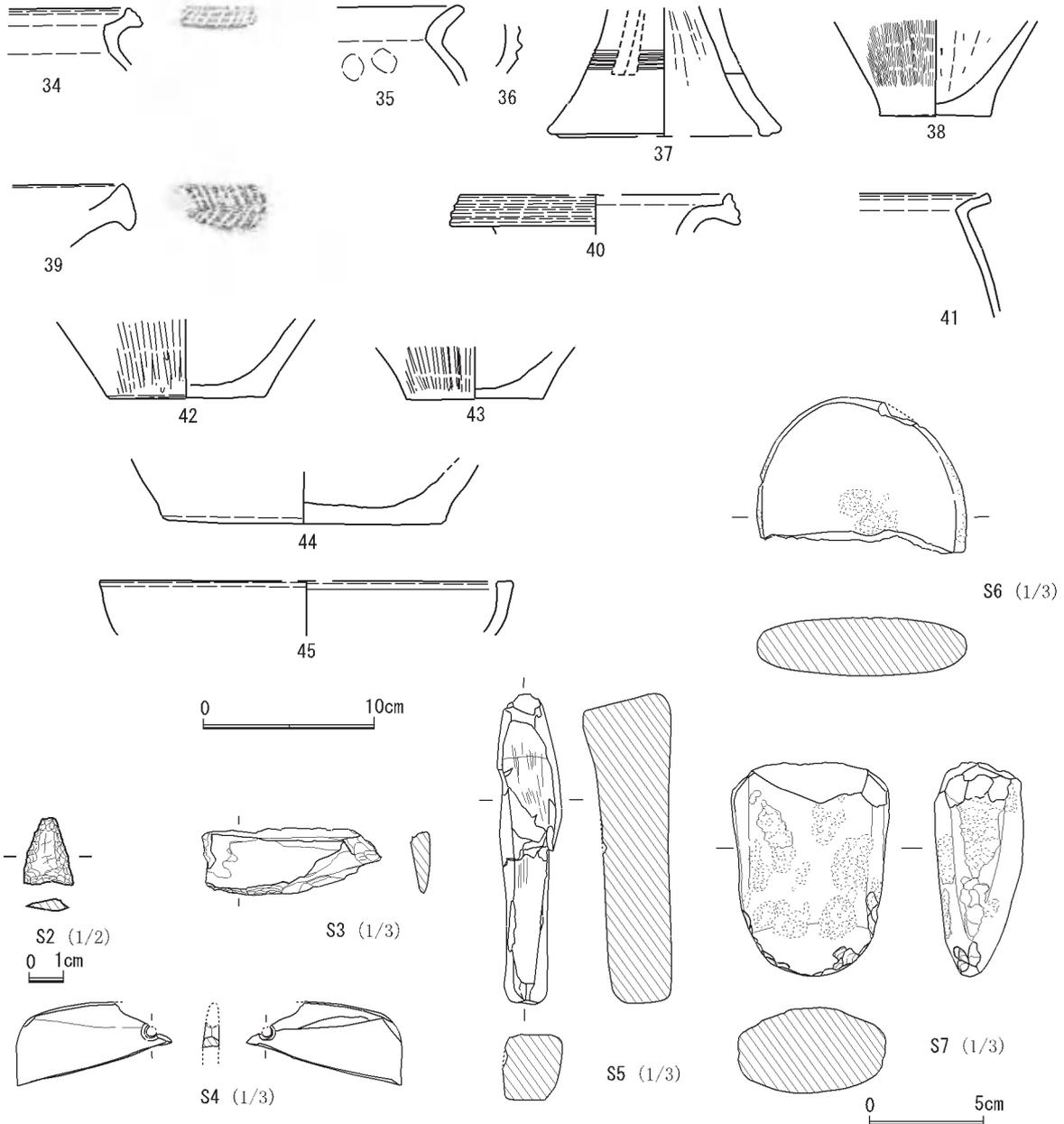
第25図 土壙 5 (1/30)

(4) 遺構に伴わない弥生時代の遺物 (第26図)

遺構検出中に採集され、遺構に伴うかどうか不明な遺物が多数できた。そこで、ここに一項設けて実測できた弥生遺物を掲載して、説明を加えることにした。

34~45は土器である。**34・35**は2区で出土している。2区には竪穴住居や段状遺構があるため、いずれかの遺構から出土したものであろう。**34**は甕の口縁小片で、肥厚した口縁端外面には凹線の上に刻み目を施している。**35**は「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。**36~38**は3区で採集された。谷から出たものか段状遺構12からのものか不明である。**36**は特殊壺の胴部凸帯部分である。このような土器を出土する遺跡が近辺にあるということである。**37**は高杯の脚部である。**38**は甕の底部である。**39~45**は4区で採集された。ほとんど中央部の土器だまりから出土している。**39**は口縁外面に綾杉文を持つ。**40**は凹線文を持つ。**41**は**35**とは異なる「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。**42**は壺の底部であろう。**43**は甕の底部。**44**は壺か鉢の底部であろう。**45**は高杯である。

石器は6点出土している。**S2**は、4区土器だまりから出土し、サヌカイト製で、先端が少し欠けている。**S3**は、3区で表採した粘板岩製の石包丁である。**S4**は、3区北トレンチで採集した泥質片岩製の石包丁である。**S5**は、2区表採の流紋岩製砥石である。**S6**は、3区表採の流紋岩製叩き石である。**S7**は、角閃石安山岩製蛤刃石斧である。4区南西部の柱穴から出土した。

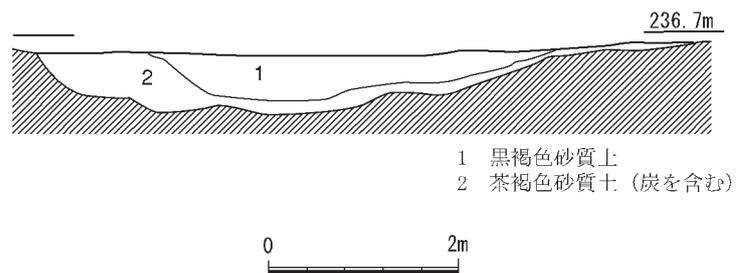


第26図 遺構に伴わない弥生時代遺物

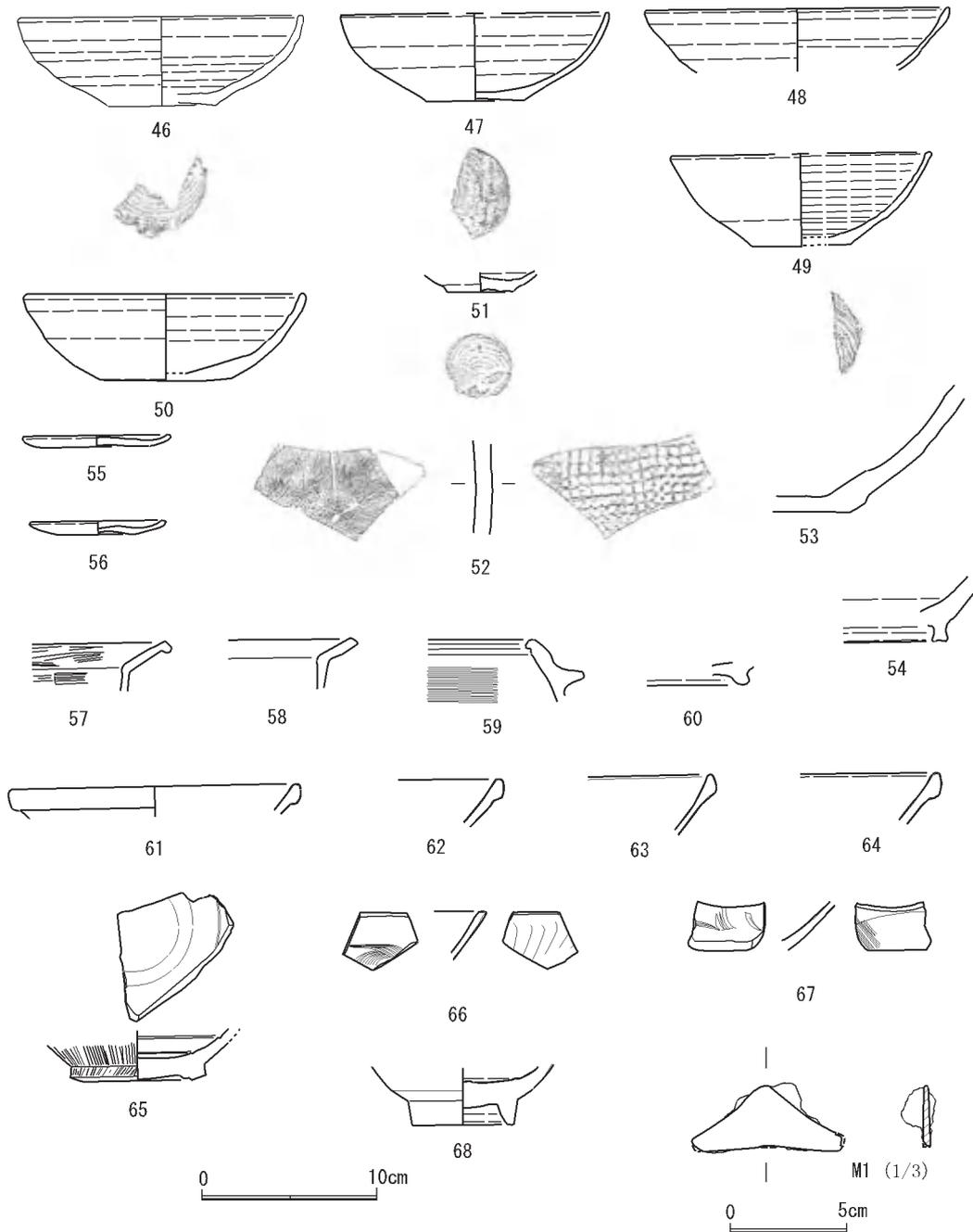
2 中世の遺構・遺物

3区谷 (第4図・第27図)

3区の西側には中世の遺物を多量に包含する谷が検出できた。第1層・第2層とも若干弥生土器が混入するが中世土器が大半であることからこの谷は中世に埋まったものと考えることが可能である。なお、検出面での最大幅は、7.0mを測る。



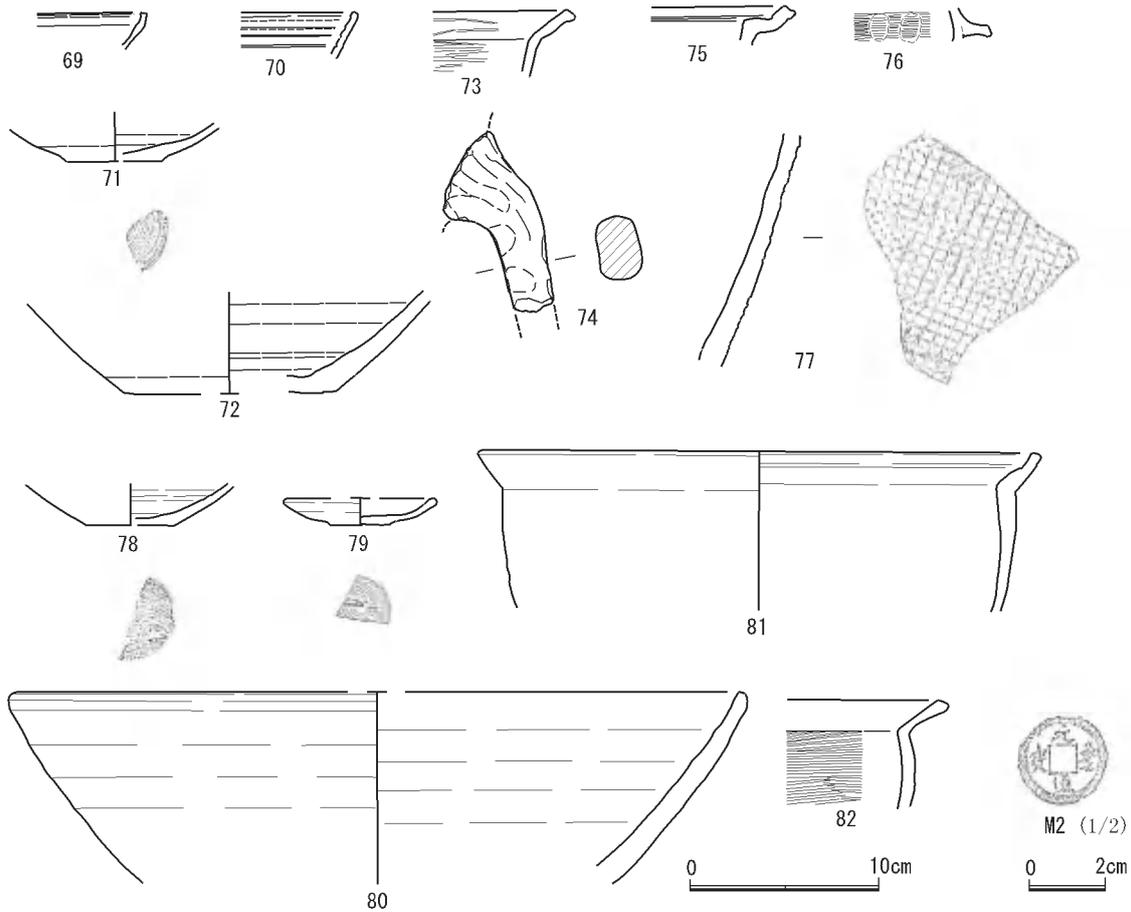
第27図 3区谷断面図 (1/80)



第28図 3区谷出土中世遺物

3区谷出土遺物（第28図）

46～49は、勝間田焼碗であり、底部には回転糸切りが明瞭に残っている。50は、土師質であるが勝間田焼の焼成が悪い製品であろう。51は、勝間田焼の皿で、これにも底部には回転糸切りが明瞭に残っている。52は、須恵器甕の胴部片であり、内面はハケ目、外面には格子目のタタキを施している。53は、瓦質土器で、鉢と考えられる。54は、須恵器高台付壺か。57・58は、瓦質土器で、土鍋の口縁部小片である。59は、瓦質土器の羽釜である。60は、土師質土器で、高台付碗である。61～68は、白磁である。61～64は、玉縁を持つ碗で、66は、素縁の碗である。65は、玉縁が付き、68には、素縁が伴うと考えられる。66・67にはネコガキ文様が認められる。M1は、火打ち鎌と呼ばれる鉄器である。二等辺三角形をしており、幅68mm・高さ25mm・厚さ2mmを測る。



第29図 1・4区出土 中世遺物

その他表採された中世遺物（第29図）

69～71は、1区で表採した勝間田焼椀で、71には底部に回転糸切りが明瞭に残っている。72は、瓦質土器の鉢である。73は、土師質土器の土鍋である。74は、土鍋に付く三足の付け根部分である。75は、土師質土器の土鍋、76は、瓦質土器の羽釜である。77は、須恵器甕の胴部片で、格子目叩きが認められる。78は、4区で出土した勝間田焼椀で、79は、土師質土器の皿である。80は、鉢、81・82は、土鍋である。M2は、1区で出土した古銭で、「元豊通寶」と読むことができる。

第1表 石器観察表

挿図 番号	種類	石 材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	重さ (g)	調査時 遺構名	報告書 遺構名	時 期	整理 番号	写真	備 考
S1	石包丁	泥質片岩	79.0	41.0	6.0	23.5	段状遺構1	段状遺構1	弥生中期	6	◎	穴なし
S2	石鏃	サヌカイト	19.5	14.5	3.5	0.9	4区	4区	弥生中期	5	◎	先端欠く
S3	石包丁	粘板岩	78.0	30.0	10.0	29.9	3区表採	3区	弥生中期	7	◎	穴なし
S4	石包丁	泥質片岩	68.0	37.0	7.5	22.0	3区トレンチ	3区	弥生中期	4	◎	半分
S5	砥石	流紋岩	136.5	27.0	39.0	156.4	2区表採	2区	弥生中期	3	◎	使用少ない
S6	叩き石	流紋岩	68.5	91.5	25.5	225.0	3区表採	3区	弥生中期	1	◎	半分
S7	石斧	角閃石安山岩	94.0	69.0	39.0	360.3	4区a柱穴	4区	弥生中期	2	◎	近完形品

第2表 土器観察表

挿図番号	掲載遺構名	種別	器種	法量 (cm)			色調	胎土	残存状況
				口径	底径	器高			
1	竪穴住居1	弥生土器	甕	—	—	—	鈍橙色(10YR7/4)	細砂	口縁部小片
2	竪穴住居1	弥生土器	甕	—	—	—	褐色(5YR6/6)	細砂	口縁部小片
3	竪穴住居1	弥生土器	甕	—	—	—	褐色(5YR6/4)	細砂	口縁部小片
4	竪穴住居1	弥生土器	甕	—	—	—	鈍黄褐色(10YR7/4)	細砂	口縁部小片
5	竪穴住居1	弥生土器	壺	—	—	—	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂	底部小片
6	竪穴住居1	弥生土器	甕	—	5.0	—	鈍橙色(7.5YR6/4)	粗砂	底部のみ
7	竪穴住居1	弥生土器	甕	—	8.8	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	底部小片1/7
8	竪穴住居1	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂	口縁部小片
9	竪穴住居1	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍橙色(7.5YR7/4)	細砂	口縁部小片
10	竪穴住居1	弥生土器	高杯	—	—	—	褐色(5YR6/6)	粗砂	脚部小片
11	竪穴住居1	弥生土器	器台	—	28.6	—	鈍黄褐色(10YR6/4)	細砂	脚部1/10
12	竪穴住居2	弥生土器	甕	24.6	—	—	鈍黄褐色(10YR7/4)	細砂	口縁部1/6
13	竪穴住居2	弥生土器	甕	—	6.2	—	鈍褐色(7.5YR7/4)	粗砂	底部1/4
14	竪穴住居2	弥生土器	甕	—	5.6	—	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	底部1/2
15	竪穴住居2	弥生土器	鉢	—	—	—	鈍褐色(7.5YR6/4)	細砂	口縁部小片
16	竪穴住居2	弥生土器	高杯	—	—	—	褐色(7.5YR7/6)	細砂	脚部小片
17	竪穴住居2	弥生土器	高杯	27.0	—	—	褐色(7.5YR6/6)	粗砂	口縁部・杯部1/5
18	段状遺構1	弥生土器	甕	18.0	—	—	鈍黄褐色(10YR7/2)	細砂	口縁部小片
19	段状遺構1	弥生土器	甕	—	—	—	鈍褐色(7.5YR7/4)	細砂	口縁部小片
20	段状遺構2	弥生土器	甕	12.9	—	—	褐色(5YR6/6)	礫	口縁部1/3
21	段状遺構2	弥生土器	甕	12.2	—	—	鈍黄褐色(10YR7/3)	細砂	口縁~肩部1/6
22	段状遺構1	弥生土器	甕	—	5.7	—	鈍褐色(7.5YR6/4)	粗砂	底部および胴下半部1/4
23	段状遺構1	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍褐色(7.5YR6/4)	粗砂	脚部小片
24	段状遺構1	弥生土器	高杯	22.8	—	—	鈍赤褐色(5YR5/4)	礫	口縁部1/10以下
25	段状遺構2	弥生土器	甕	11.4	—	—	鈍褐色(10YR7/3)	細砂	口縁部1/6
26	段状遺構2	弥生土器	壺	—	7.4	—	鈍褐色(7.5YR7/3)	粗砂	底部1/3
27	段状遺構2	弥生土器	甕	—	5.7	—	鈍褐色(7.5YR7/4)	細砂	底部のみ
28	段状遺構2	弥生土器	高杯	—	—	—	褐色(5YR7/6)	微砂	口縁部小片
29	段状遺構2	弥生土器	高杯	—	—	—	灰黄色(2.5YR6/2)	粗砂	杯部破片
30	段状遺構2	弥生土器	高杯	—	—	—	褐色(5YR6/6)	礫	杯部・脚部破片
31	段状遺構4	弥生土器	甕	—	5.2	—	鈍黄褐色(10YR7/4)	微砂	底部1/2
32	段状遺構5	弥生土器	器台	—	—	—	鈍褐色(7.5YR7/4)	細砂	脚部小片
33	段状遺構7	弥生土器	甕	16.0	—	—	鈍黄褐色(10YR7/4)	細砂	口縁部1/6
34	2区	弥生土器	甕	—	—	—	黄灰色(2.5Y5/1)	粗砂	口縁部小片
35	2区	弥生土器	甕	—	—	—	鈍褐色(7.5YR7/4)	礫	口縁部小片
36	3区	弥生土器	特殊壺	—	—	—	鈍褐色(7.5YR6/4)	細砂	胴部凸帯小片
37	3区	弥生土器	甕	—	6.3	—	鈍褐色(7.5YR6/3)	細砂	底部1/2
38	3区	弥生土器	高杯	—	12.3	—	鈍褐色(7.5YR7/3)	細砂	脚部1/6
39	4区	弥生土器	壺	—	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	口縁部小片
40	4区	弥生土器	壺	15.5	—	—	褐色(5YR6/6)	細砂	口縁部1/4
41	4区	弥生土器	甕	—	—	—	褐色(7.5YR7/6)	礫	口縁部小片
42	4区	弥生土器	壺	—	—	—	黒褐色(10YR3/2)	細砂	底部1/6
43	4区	弥生土器	甕	—	7.9	—	鈍褐色(7.5YR7/4)	粗砂	底部2/5
44	4区	弥生土器	壺	—	15.8	—	鈍褐色(7.5YR6/4)	細砂	底部1/8
45	4区	弥生土器	高杯	23.8	—	—	鈍褐色(7.5YR6/4)	礫	口縁部1/10
46	3区	勝間田焼	碗	16.0	6.2	5.1	灰色(5Y6/1)	精良	全体1/3
47	3区	勝間田焼	碗	15.2	5.6	5.0	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	全体1/4
48	3区	勝間田焼	碗	17.0	—	—	灰色(5Y6/1)	精良	口縁部1/6
49	3区	勝間田焼	碗	14.2	4.6	5.0	灰白色(2.5Y7/1)	精良	底部・体部1/4
50	3区	土師器	碗	15.8	7.5	5.0	浅黄褐色(7.5YR8/4)	粗砂	口縁部1/5・底部2/3
51	3区	勝間田焼	皿	—	3.8	—	灰黄褐色(10YR5/2)	精良	底部
52	3区	須恵器	甕	—	—	—	灰色(N5/0)	精良	胴部小片
53	3区	瓦質土器	鉢	—	—	—	灰色(5Y5/1)	細砂	底部小片
54	3区	須恵器	壺	—	—	—	灰色(5Y5/1)	精良	高台1/8
55	3区	土師器	皿	8.2	6.0	0.6	浅黄褐色(10YR8/3)	粗砂	全体1/2
56	3区	土師器	皿	7.4	4.6	0.8	黄灰色(2.5Y5/5)	細砂	口縁部1/4
57	3区	土師器	鍋	—	—	—	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	口縁部小片
58	3区	土師器	鍋	—	—	—	黄灰色(2.5Y4/1)	礫	口縁部小片
59	3区	瓦質土器	羽釜	—	—	—	灰色(N6/0)	細砂	つば部小片
60	3区	土師器	碗	—	—	—	灰黄色(2.5Y6/2)	精良	高台小片
61	3区	白磁	碗	—	—	—	灰白色釉(10Y8/0)	精良	口縁部小片
62	3区	白磁	碗	—	—	—	灰黄色釉(2.5Y7/2)	精良	口縁部小片
63	3区	白磁	碗	—	—	—	灰色釉(5Y6/1)	精良	口縁部小片
64	3区	白磁	碗	—	—	—	灰白色釉(5Y7/1)	精良	口縁部小片
65	3区	白磁	碗	—	7.7	—	灰白色釉(10Y7/1)	精良	高台1/4
66	3区	白磁	碗	—	—	—	灰白色釉(10Y7/1)	精良	口縁部小片
67	3区	白磁	碗	—	—	—	灰白色釉(7.5Y6/1)	精良	体部小片
68	3区	白磁	碗	—	5.6	—	灰白色釉(N8/0)	精良	高台1/2
69	1区	勝間田焼	碗	—	—	—	灰白色(N7/0)	微砂	口縁部小片
70	1区	勝間田焼	碗	—	—	—	灰色(N6/0)	微砂	口縁部小片
71	1区	勝間田焼	碗	—	5.0	—	灰白色(N7/0)	微砂	底部1/4
72	1区	瓦質土器	鉢	—	11.2	—	灰色(N5/0)	微砂	底部1/4
73	1区	土師器	鍋	—	—	—	鈍黄褐色(10YR7/4)	細砂	口縁部小片
74	1区	土師器	鍋	—	—	—	鈍褐色(7.5YR6/4)	微砂	脚部片
75	1区	瓦質土器	鍋	—	—	—	灰色(10Y6/1)	細砂	口縁部小片
76	1区	瓦質土器	羽釜	—	—	—	灰白色(N7/0)	粗砂	つば部小片
77	1区	勝間田焼	甕	—	—	—	暗灰色(N5/0)	細砂	胴部破片
78	4区	土師器	碗	—	4.6	—	鈍褐色(7.5YR7/6)	細砂	底部1/2
79	4区	勝間田焼	皿	7.6	3.2	1.5	灰色(10Y5/1)	精良	口縁部1/8・底部1/5
80	4区	瓦質土器	鉢	38.0	—	—	灰色(N6/0)	粗砂	口縁部1/20以下
81	4区	土師器	鍋	29.6	—	—	鈍褐色(7.5YR6/12)	礫	口縁部小片
82	4区	土師器	鍋	—	—	—	鈍黄褐色(10YR7/4)	細砂	口縁部小片

第3表 遺構一覧表

番号	区	遺構名	規模	時期	遺物	柱穴	溝	中央穴
1	2	竪穴住居1	7.5×4.0m	弥生中期	土器少量 梅種子(炭化)	あり	あり	あり
2	4	竪穴住居2	2.8×2.0m	弥生中期	土器若干	なし		
3	1	段状遺構1	8.2×2.0m	弥生後期初頭	土器少量	あり	あり	
4	1	段状遺構2	3.0×1.0m	弥生後期初頭	土器若干	あり	あり	
5	1	段状遺構3	2.2×1.0m	弥生後期	土器若干 梅種子(炭化)	なし	あり	
6	2	段状遺構4	1.0×1.0m	弥生中期	土器若干	あり	あり	
7	2	段状遺構5	3.0×0.9m	弥生中期	土器若干	なし	あり	
8	2	段状遺構6	2.0×1.0m	弥生後期	土器若干	なし	あり	
9	2	段状遺構7	0.5×1.0m	弥生中期	土器若干	なし	あり	
10	2	段状遺構8	3.7×1.8m	弥生後期	土器若干	なし	あり	
11	2	段状遺構9	2.4×0.5m	弥生後期	土器若干	あり	あり	
12	2	段状遺構10	2.2×0.2m	弥生後期	土器若干	あり	あり	
13	2	段状遺構11	4.0×0.2m	弥生後期	土器若干	あり	あり	
14	3	段状遺構12	3.6×1.0m	弥生後期	土器若干	なし	あり	
15	4	段状遺構13	3.1×0.8m	弥生中期	土器若干	なし	あり	
16	4	段状遺構14	3.8×0.9m	弥生中期	土器若干	なし	あり	
17	4	段状遺構15	2.3×0.3m	不明	なし	なし	あり	
18	4	舟形土壇	3.5×1.4m	不明	なし	なし		
19	1	土壇1	径0.8m	不明	なし			
20	2	土壇2	1.6×0.8m	弥生後期	なし			
21	2	土壇3	0.8×0.6m	弥生後期	なし			
22	3	土壇4	2.1×0.8m	不明	なし			
23	4	土壇5	2.1×1.3m	不明	なし	なし		
24	3	谷	20×7m	弥生後期・中世	土器多数 石包丁			
25	2	柱穴群	10本以上	弥生後期	土器若干			
26	4	土器だまり	2.0×1.5m	弥生中期	土器若干 石鏃	なし	あり	

註

註1 P.15地名表の34(地図は吉井町3の34)

註2 吉井町史編纂委員会『吉井町史』第二巻 資料編上 1991年3月 P.17

註3 この件については、周知の遺跡が破壊されたことにより、岡山県教育委員会は、事業者および吉井町長の顛末書をとって文化庁長官あてに具申し、今後このようなことのないよう指導を行っている。『岡山県埋蔵文化財報告』15 岡山県教育委員会 1985年3月 P.13~14

第4章 まとめ

この度調査を行った北坂奥遺跡からは、弥生時代中期後半から後期前半の竪穴住居・段状遺構・土壙などの遺構や量的に少ないながら弥生土器・石器も検出された。また、中世の遺構は谷の他には柱穴が若干あり、土器は弥生土器とほぼ同程度出土している。それらのうち、特徴ある遺構と遺物に関して、少し考察してまとめとしたい。

1 竪穴住居について

2区の東向き緩斜面で検出した竪穴住居1は、平面円形で、中央穴3個、壁体溝3条、間仕切り状の溝3条を認めることができた。したがって、少なくとも3軒の住居が同じ位置に建っていたことになる。柱穴を観察すると、ほぼ同じ範囲内に6個が集中していることが判明した。このことは、柱だけの掘りなおしを5回も行っていることになる。出土した弥生土器片の型式からみると、中期後半が大半だが、後期に属するものも見られるので、この間に数度の建て替えを行ったものであろう。

4区の東向き緩斜面で検出した竪穴住居2は、平面方形で、壁体溝1条が壁際より少し離れて検出できた。床面中央と考えられる部分に、楕円形に被熱した部分、いわゆる火処がある。この住居は10cmほど土砂で埋まった後、垂直に落下した状態の大小の角礫が検出された。大き目の石が楕円形の周囲に、そして小石が中央部に敷き詰めたように配置されている。土器片などの遺物は、小石の間から出土している。これらの集石がこの住居に伴っていたものとすれば、草葺屋根を押さえるためのおもしも推定される。出土した弥生土器片の型式からみると、中期後半に属する。

2 段状遺構について

本遺跡では、15基の段状遺構を検出した。いずれも機能から考えると住居あるいは作業場となるものであろう。斜面の高い側を削り取って、低い側を埋め立てれば、検出した平坦面幅の2倍程度の広さを確保できると仮定すれば、段状遺構1については、長さ10m・幅2mの20㎡もの広さがある。また、ほとんどの段状遺構に、壁体溝が伴うことも判っている。柱穴については、長さが短いものには検出できないものもある。遺物は、ほとんど弥生土器片が伴っており、中期後半～後期前半に属する。

3 土壙について

舟形土壙は4区で検出できた。土壙5についても舟形土壙と呼べそうである。遺物が出土していないので時期の決定ができないが、検出状況から見て、弥生中期後半と考えたい。性格については、墓の可能性はある。

4 中世土器について

全区で中世の土器が出土しているが、特に3区の谷において集中的に採集された。勝間田焼・瓦質土器・白磁が見られる。これらは、鎌倉時代に属する。



1 調査区遠景（東上空から）



2 1区・2区全景（上が北）



3 3区全景（上が北西）



4 4区a全景（上が北東）

図版 2



1 竪穴住居 1
(南東から)

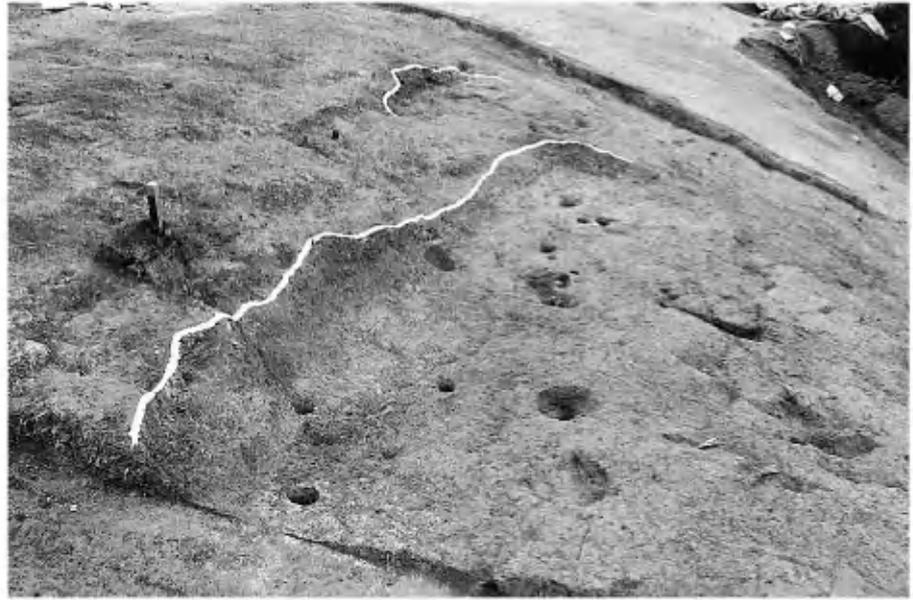


2 竪穴住居 2 集石状況 (北から)

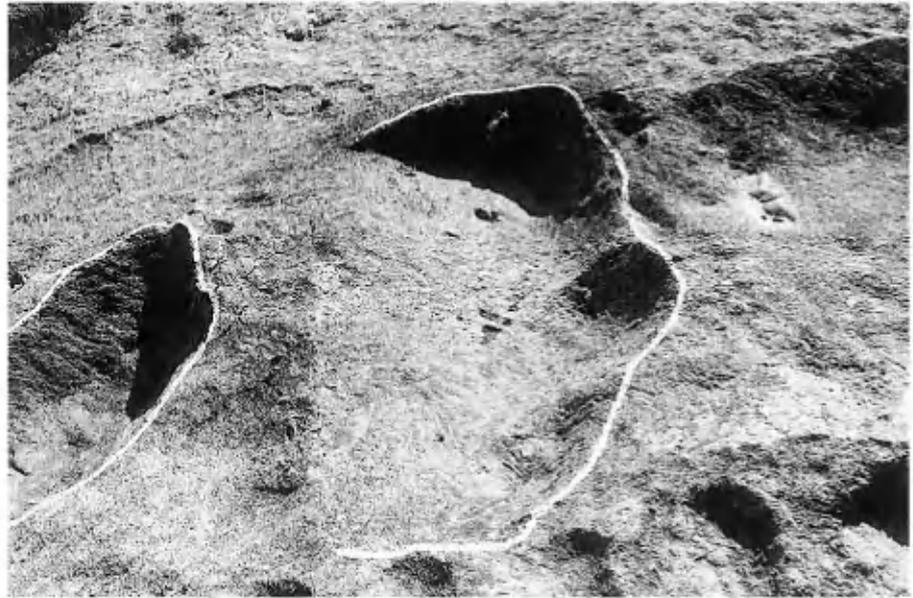


3 竪穴住居 2
完掘状況
(北から)

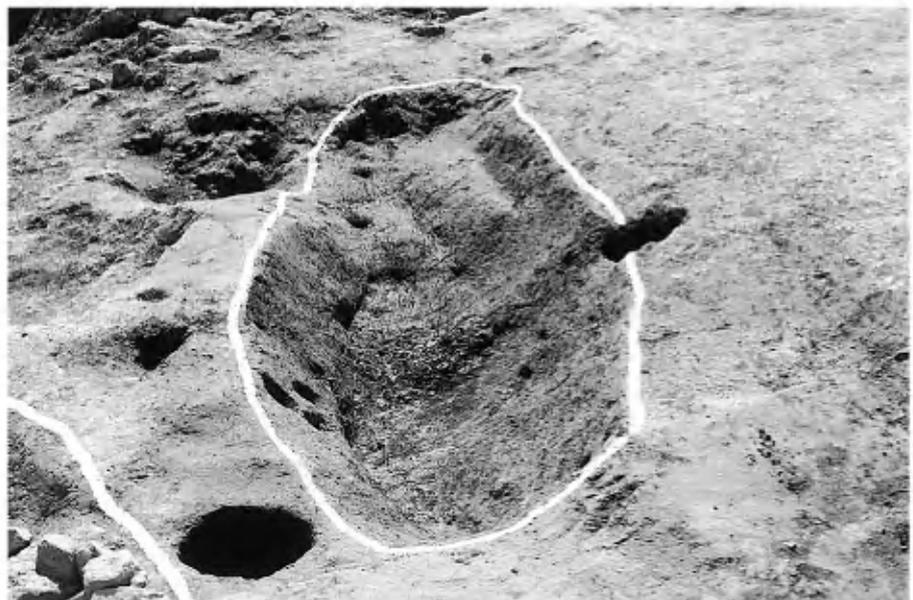
1 段状遺構 1・2
(南東から)



2 段状遺構13
(北東から)



3 舟形土壙 1
(北東から)



図版 4



報告書抄録

ふりがな	きたさかおくいせき							
書名	北坂奥遺跡							
副書名	一般農道整備事業（是里2期地区）に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	172							
編著者名	浅倉秀昭							
編著機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3				TEL 086-293-3211			
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6				TEL 086-224-2111			
発行年月日	2003年1月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村		° ' "	° ' "		m ²	
きたさかおくいせき 北坂奥遺跡	おかやまけん 岡山県 あかいわぐん 赤磐郡 よしちよう 吉井町 くろもと 黒本	33325	34	34° 35' 20"	134° 4'20"	1998.07.23 ～ 1998.08.06 1999.04.05 ～ 1999.06.17	100m ² 2,650m ²	一般農道整備事業 (是里2期地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
北坂奥遺跡	集落	弥生時代中期 ～ 後期	竪穴住居 段状遺構 土壇	弥生土器 石器 須恵器 白磁				

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告172

北坂奥遺跡

一般農道整備事業（是里2期地区）に伴う発掘調査

平成15年1月20日 印刷

平成15年1月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2